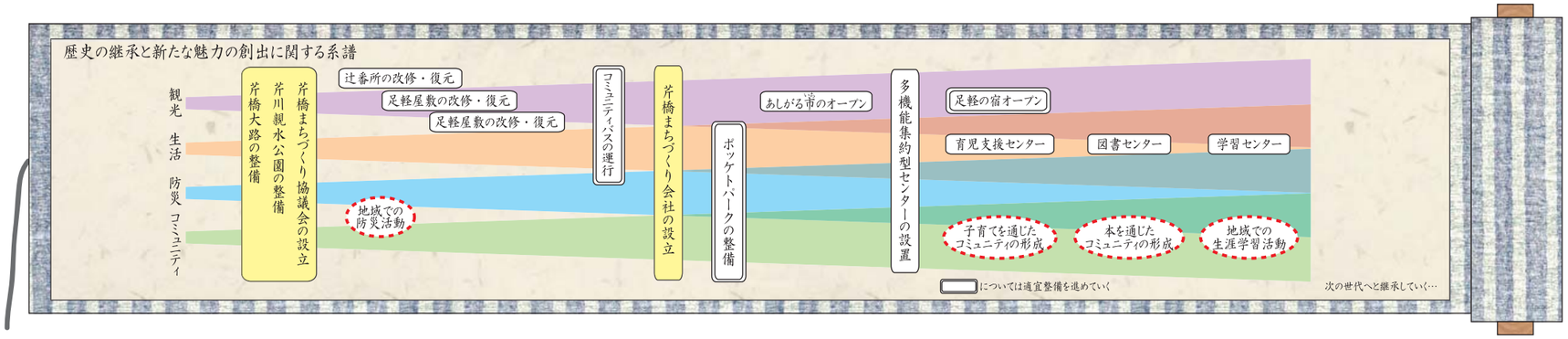
表情の奏
―芹川オムニバスタウン―

街の歴史と変遷

古くは東山道（中山道）の宿駅が設けられた交通の要衝として、江戸期には彦根城30万石の城下町として彦根は栄えた。対象地区は「善利組」と呼ばれる足軽組屋敷が建ち並んでいた街区であり、敵からの侵入を阻害するための「どんつき」や「食い違い」が各所に配置されている。
現在は、その城下町がほぼそのまま現在の中心市街地に移行したため、当時の面影を色濃く残した街区構成となっている。

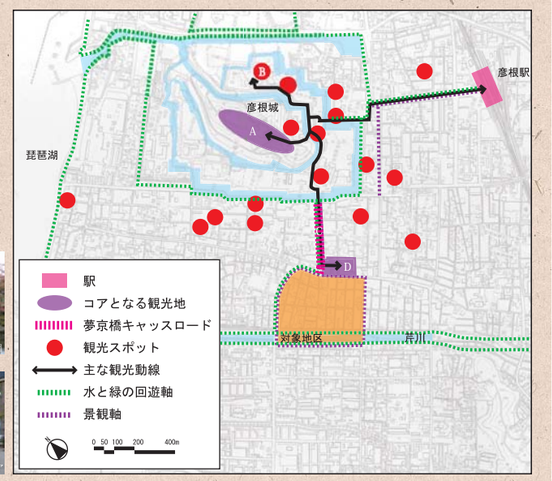


現状分析　―彦根市の観光について―

彦根市の代表的な観光資源として、彦根城と夢京橋キャッスルロード・四番町スクエアが挙げられる。
彦根城では国宝である天守閣を始めとして、現存する数々の貴重な文化財を目にすることができる。夢京橋キャッスルロードや四番町スクエアでは、江戸や大正時代の街並みを復元することで、新たな観光資源として多くの人々に親しまれている。
その中で、対象地区は歴史的な街並みを継承しながらも、現状では観光客の利用は見られない。対象地区の観光化に関しては、具体的な課題として以下の３点が考えられる。

□観光の表情

1. 水と緑の回遊軸（芹川）と観光動線が交わらない
2. 観光客が留まり、憩えるような空間が不足している
3. 足軽屋敷などの観光資源の価値を生かしきれていない



A. 彦根城

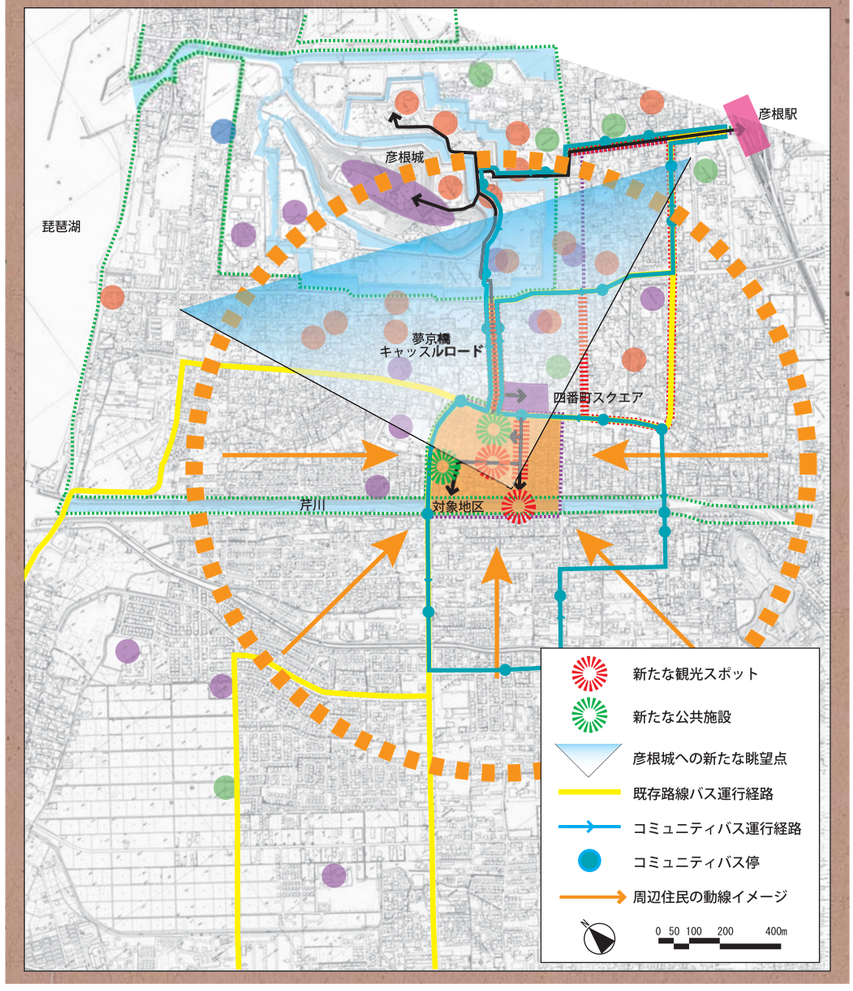
B. 玄宥橋

C. 夢京橋キャッスルロード

D. 四番町スクエア

彦根城への新たな眺望点からの景観

整備後の広域的な地区の位置づけについて



現状分析　―芹橋地区の生活環境について―

芹橋地区は、周辺に多くの教育施設と商店街を持ち、地区を横断する芹川を中心とした豊かな自然環境と、足軽の歴史性を継承する貴重な地区であると言える。
しかし、近年では建物の老朽化や空き地・空き屋の問題が顕在化しており、また一方で、一部の地区で街並みにそぐわない新築の建物も増えてきている。その中で、対象地区・対象地区周辺においては以下の様な課題が挙げられる。

□生活の表情

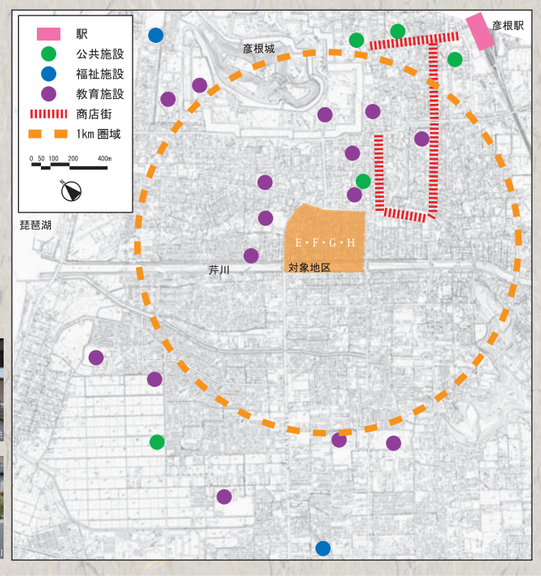
1. 路地が細く、車利用者は不便を強いられている
2. 歩行者と車がすれ違うスペースがなく危険である
3. オープンスペースなど憩いの空間が不足している

□防災の表情

1. 路地が細く、災害時等に緊急車両が地区に入れない
2. 消防水利が地区の大半をカバーしきれていない
3. 建物の老朽化による不燃化対策が急務である

□コミュニティの表情

1. 地区の周辺に公共施設が不足している
2. 高齢化が進行しており、若い世代の流入が難しい
3. 地域全体を考え、マネジメントするような組織がない



E. 空き屋化する老朽化した建物

F. 車の通行が困難な細い路地

G. 利便性の低い路地奥の駐車場

H. 街並みを断つ空き地の増加

コンセプト

まちに様々な場面を創り出し、多様性（オムニバス）
ある魅力的な市街地形成を目指していく
これにより生まれる豊かな人の営みがまちの表情となり、
交わりながら音楽のように奏でられていく

□観光の表情

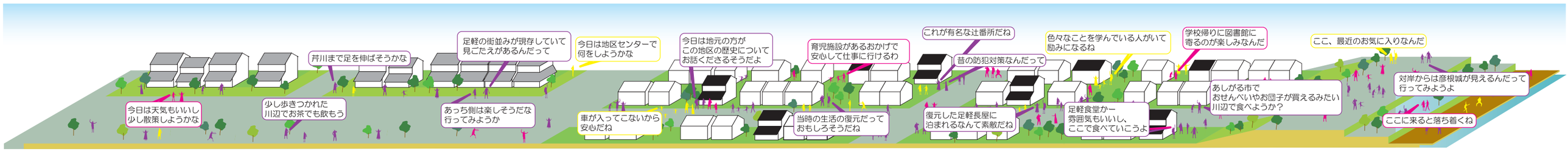
彦根城周辺で完結する観光動線を水と緑の回遊軸まで引き込むため、地区内に歩行者専用の芹橋大路を新たに整備し、観光客を誘導すると共に、さらに奥へと人を呼び込む。そこでは、芹川沿いからの城への眺望を楽しめる、滞留可能な空間を創出する。

□生活の表情

歴史ある狭隘道路を保存しつつ、フリンジパーキングと部分的な交通規制の導入によって地区内の自動車交通を最小限に抑え、車の利便性と歩行性の適切なバランスを確保する。また、親水公園やポケットパークを整備し住民にとっての憩いの場を創出する。

□防災の表情

拡張した芹橋大路に緊急車両が通行できるようにし、また各所にポケットパークを整備すると共に消防水利を設置することで、地域の防災性の向上を図る。老朽化した空き家などは、まちづくり会社が所有し、不燃化に向けた一元的な管理が行えるようにする。

□コミュニティの表情

周辺住民も含めた地域のコアとなるような公共施設を設置し、住民と観光客の交流を誘発するような空間を創出する。また両者の地区へのアクセス性確保のために、住居（南側）と観光地（北側）を回遊するコミュニティバスを新たに運行させる。